

「その優しさがアダとなる」 連々

▽主役：ヒロインのような優しい人が大好き。人を見る目がある。カフェを営んでいる。

●帰宅ラッシュの街中

(前を歩くヒロインを追い越し、横目で見ると、その一瞬で全てを決めて、彼女の前を歩きながら取り出したスマホをポケットに入れようとして落とす。ヒロインが声をかけてくる)

あ、あれ…ほんとだ…！ありがとうございます！！気付かなかった…あ、待って！

あの…僕、スマホないとほんと、本当に大変になるので…お礼、させてもらえませんか？えーと今、帰宅途中でした？ご飯、とか…嫌でなければ。

(ナンパみたい、と笑うヒロイン)

確かに(笑) これじゃナンパと同じですね。それじゃあ、お姉さんをナンパします。というか、もうしてますね(笑) 予定、大丈夫なら、僕におごられてくれませんか？

(頷くヒロイン)

よし。じゃあ、僕についてきてください。

(隣を歩く二人)

仕事帰りは一段と腹減りますよねえ、料理とかする気全然起きないですよ。お姉さんはちゃんと食べてそうですね。…え？いやいや！太ってるって言いたいんじゃないんです！

僕、ガリガリの女の子見ると心配になりますよ。健康そう、むしろ柔らかそうな女の子のほうがいいな。ふふっ、セクハラとか言わないでくださいね。

お姉さんは…どんな男の人が好きなのかな。秘密？もったいぶるんですねえ？

僕とか、タイプだったりしませんか？

(頬を赤らめるヒロイン)

なんて、冗談言ったら着きました。

(明かりのついていないカフェ、戸惑うことなく中へ。敬語終わり)

怖くないよ？僕の行きつけの店だから。二階、上がってってくれる？店員呼んでくるから。

(階段上がってすぐのドア前で立ち止まるヒロインのもとへ)

さて、中、はいろいろか。

(そこは自室。すぐに施錠する)

あ？やっとなついていた？まあまあ落ち着いて、そのベッドにでも座ってよ。無理？あそ。フハッ拳動不審すぎる(笑) かわいいね。

(にじりよって、ベッドに追い詰める)

全然、分かんなかったかなあ？スマホ、わざと落としたんだ。こんな喧騒で、僕のために立ち止まってくれる君は、本当に優しい人だ。

そんな人を、ずっと待ってたんだ。

(手ごめにする、口づけを始める)

んっ…ちゅ、ちゅう…っふ。

期待、してた、でしょ？んっ…ちゅっちゅう…。

こういうとき、抵抗とか意外とできないもんでしょ？

んふふっ大丈夫、君はきつと僕を受け入れるよ。そういうカオ、してる。

これからじっくり、僕のこと教えてあげるからね…。

(キス、フェードアウト)

…以上 718 字

© 連々 <https://www.renrenrenren.com>

二次配布と自作発言は禁止しています。フリー台本であることを記載してください。